

川上宏奨学金受給研究報告書

研究題目

2人乗りヨットの操船場面に見られる相互理解

——『受け手デザイン』と『触覚の利用』の観点から——

1. 研究目的

本研究では、先行研究では取り上げられていない、ヨット競技における実践的な場面でのマルチモーダル相互行為分析を行った。所属している成城大学体育会ヨット部での調査を、2年次から進めてきた。2年間の調査の結果からマルチモーダル相互行為分析における「受け手デザイン」と「触覚の利用」に興味をもち、本論ではこの2点を中心に分析を行った。

2. 先行研究

2年間の調査からは、分かったことなど成果が3つある。1点目として、ヨット競技の動作にはマニュアルのようなものが存在しているが、その一瞬を取り巻く環境に応じて2人の乗員は柔軟に対応していたことだ。2点目として、発話の中で反応機会場を設けて適切な位置で動作に対する評価を行っていた。そして最後の点として、2年かけて動作を丹念に分析した結果、ヨット競技における方法論を確立できた。

また、ヨット操船に関するエスノメソドロジー研究である Button & Sharrock (2013) からは、ナビゲーションに関する内容について学んだ。また、2人の乗員が状況認識と以後の戦略についての見解を交換しながら同じ目標達成のために適切な選択をしており、これが順位をひとつでもあげることに繋がるということが明らかになった。

3. 研究方法

本研究は1期調査を5月、2期調査を8月に神奈川県葉山沖で実施した。映像は文芸学部共同研究室のGoPro Hero10で、音声は同じく共同研究室のOLYMPUS ボイストレック V803 に audiotecnika AT9901 のマイクを装着して別々に記録した。これを Wondershare Filmora13 というアプリケーションを用いて結合した。カメラは防水ケースに入れて、ヨット後部甲板に吸盤で設置した。マイクは胸元にテープで貼り付けた。調査対象は3年生の部

員（本論では「S」と表記）と筆者（本論では「C」と表記）である。

4. 研究結果

まず「受け手デザイン」の原則が適用される事例のひとつとして、「あげます」や「おとします」といった、通常では理解できない、目的語の脱落した発話が観察された。ヨット競技は一秒を争う。その中で、共に設定した目標を達成するためには、常に発話を続けて情報を共有し続けることが求められる。限られた時間を最大限に活用しようという姿勢が、上記のような目的語の脱落した発話を必要としているのである。

次に「触覚の利用」について述べる。ヨットにはセイル（帆）を調節するためのシートと呼ばれる紐が沢山ついている。これを引いた際の感覚が「いつもより硬い」と察知することが、トラブルへの気づき兼修復の開始点になっていた。そして、トラブルの原因が判明した瞬間には、「何が原因だったね」といった発話をすることなく、「ああ」という発話と指さしのみでお互いが理解していた。これも「受け手デザイン」のひとつのかたちである。2人の乗員は3年間と4年間、それぞれヨット部で活躍するなかで、相手が何を学びなにが出来るのかを熟知しているからこそ、それを基にお互いがとくだん意識することなく発話をデザインしているのであった。

本調査では、ひとつの船に乗り込む2人がひとつの船の動きを達成するまでのプロセスについて観察した結果を記した。この研究を通じて、ヨット競技をはじめとするマイナースポーツに魅力を感じる人が少しでも増えれば幸いである。

5. 謝辞

本調査の実施にあたり、奨学金を給付いただいた故川上宏教授のご家族、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。奨学金をいただけたことで、2年間の研究から一層深く分析をすることができ、大学生活の集大成として卒業論文研究を完成することが出来ました。本当にありがとうございました。